

子どもの貧困対策としての「子どもの居場所」づくり  
ー子どもの学習・生活支援事業の取組からー

社会福祉学専攻 川原 怜子

要 旨

筆者は、児童福祉に 20 年以上関わってきた経験から、2000 年代後半頃から「子どもの貧困」をよく耳にするようになり、「子どもの貧困対策」に関心を持つようになった。また、それに関連した施策である「子どもの学習・生活支援事業」に携わる機会を得た。

当初、この事業は、「世帯の所得・経済状況が子どもの学歴に影響し、学歴格差や進学格差が生まれるのではないか」との指摘から、子ども達に学力をつけさせ、世帯の自立を目指し、子ども達の貧困を断ち切るといった経済的自立を根幹にした支援が構想されていた。しかし、「子どもの学習・生活支援事業」は、高校進学支援以外の支援要素が多く含まれるものである。子どもに対する学習支援は、子どもが将来、貧困に陥るリスクを軽減するために必要な支援のひとつである。しかしながら、高校に進学すれば、貧困の連鎖は防止できるのだろうか。「子どもの学習・生活支援事業」における『社会的居場所』で生み出されているつながりが、子ども達にどのように機能するかに関して数値化・言語化されていないのはなぜだろうか。そこで筆者は、「保護者以外の大人との良い関係性の構築とその関係性の継続（関係性の貧困からの自立）が、貧困の連鎖の防止につながるのではないか」という仮説を立てた。

そこで本研究では、子ども達が『社会的居場所』での過ごし方や体験等をどのように感じているのかを子ども達自身に聞き取り、『社会的居場所』で過ごすことが子ども達の将来にどのような影響を及ぼすのかについて考えることにより、子どもの貧困の連鎖の防止に必要な、経済的自立以外の視点を整理することを目的とする。

上述の目的を達成するために、「子どもの学習・生活支援事業」における『社会的居場所』を利用している中学生及び利用していたことのある卒業生合計 5 名に、それぞれ 30 分程度のインタビューを実施した。インタビュー内容は IC レコーダーに録音し、録音データから逐語録を作成した。逐語録を精読し、半構造化面接のインタビューガイドに沿ってエピソードを抽出した。それらのエピソードを意味的なまとまりに注意しながら、個別にコーディング化を行った。次に、5 人の類似コードを 1 つにまとめ、再文脈化し、得られた概念と仮説を比較した。

調査の結果、「つながり」「相談相手」「居場所の意味」「印象に残っていること」「利用の理由」「支えられる・支える」「将来」の 7 つのカテゴリーが抽出された。

中学校卒業後も『社会的居場所』を利用している子ども達も含め、子ども達は『社会的居場所』で安心を感じていることがわかった。この「安心感」は、継続利用の大きな理由の一つとなり得ているようであった。その「安心感」は、子ども達の語りでいうところの「無理強いされない」「自分のペースで過ごすことができる」「暖かい雰囲気がある」といった情緒的なサポート、「話を聞いてもらえる（話し相手がいる）」「話すことで、必要な情報をもらえる」といった情報的なサポート、『社会的居場所』での社会体験の提供といった道具的サポートから得られるものではないかと思われる。また、「安心感」は、子ども

達が安定したつながりを感じられ、経験の欠如を解消できるような社会体験を積み重ねることにより、さらに強化されるのではないかと考えられる。その安心感は「今度は自分が次の世代をサポートしたい」という思いや、「将来をあきらめない」という思いにつながっていき、『社会的居場所』で得る様々なサポートが子ども達により影響を与えており、さらに次の世代のサポートといった、プラスの循環が生まれつつあることにも注目すべきであろう。

「子どもの学習・生活支援事業」は、生活保護世帯を含む生活困窮世帯に所属する就学児を対象とした事業である。収入が少ない家庭の子どもは、そうでない家庭の子どもに比べて、より多くのはく奪を経験していると考えられる。『社会的居場所』は、「学習環境」「趣味・極楽」のはく奪を埋める場としての機能を有していることが示唆され、これらのはく奪を埋めるための体験の場を提供することが、子ども達の自尊感情の向上や主観的幸福感の向上に良い影響を与えていることが示唆された。

利用している子ども達自身は、学習環境の提供のみを求めて『社会的居場所』を利用しているわけではないものの、『社会的居場所』の利用を通して、安心を感じ、その安心感は子ども達自身の意識の変化—「支えられる側」から「支える側」へ—につながっている。このような「支えられる・支える」といった、いわゆる「支え合う」関係を構築する場合、人と人との「つながり」が必要になる。子ども達は、家庭でも学校でもない、“居たい”“行きたい”“やってみたい”の3つの視点を満たす『社会的居場所』で、よいつながりを構築することができている。このつながりによって、子ども達は情緒的サポート、情動的サポート、道具的サポートを得ることができているのである。

これらの結論をもとに仮説を検討した結果、『社会的居場所』はつながりが生まれる場であり、経験の欠如を解消する場としての機能を有していると同時に、「学習環境のはく奪を埋める場」として機能していることが明らかになった。さらに、子ども達は『社会的居場所』で学習支援を受けるだけでなく、よいつながりを構築し、安心感を得て、将来を肯定的に捉えられるようになり、支えられる側から支える側へとその意識を変化させていることが解明された。子ども達に変容を促す要素として、学習支援だけでなく、「経験の欠如を埋める場・解消する場」として『社会的居場所』が果たす役割は大きい。

さらに、本研究では、子ども達の語りから得られた結果が、こども家庭庁が示す「子ども・若者の居場所づくりにおいて大切にしたい視点」の様々な要素に一致することが明らかになった。また、子ども達の語りから、高校進学以外の、「つながり」や「サポート」といった、社会との相互作用から生まれる支援要素が明らかになった。このことは、子どもの貧困対策としての「子どもの学習・生活支援事業」が、単に子どもの学力向上や子どもが属する世帯の自立支援に留まらず、子どもの居場所がもたらす「つながり」や「経験の欠如の解消」といった視点も重視すべきであることを示唆している。

『社会的居場所』の到達目標や効果をわかりやすく示し、測定するためには、どのようなファクターが、子ども達の成長のどの側面にどのような影響を与えているのか、そのプロセスを細かく分析しながら、長期的な指標を取り入れていく必要があるだろう。